

令和7年度放課後活動指導者研修③実施報告

実施日：令和7年9月9日

当研修は、放課後活動指導者として、地域で行う子どもたちの多様な体験活動を充実させるための知識・技能の習得を図るための研修です。第3回はサテライト開催として、総合教育センター、下都賀庁舎、那須庁舎、安蘇庁舎の4会場で実施しました。

○講話・演習「子どもの理解とその対応～子どもを理解し、その子に応じた関わり方をしよう～」

宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 准教授 司城 紀代美 氏

はじめに、「説明を聞いても作業が始められない子ども」の行動理由を考える演習がありました。受講者から挙げられた理由をもとに、子どもには様々な特性があり、聞きづらかったり、見えづらかったりと困り感をもっている子どもが少なくないことが示されました。そのような子どもに対しては、環境を整えたり、道具を工夫したりすることで、困り感が軽減されることを話されました。また、特定の場面を想定して、子どもの問いに対する答え方や言葉かけの方法などを具体的に紹介されました。否定的でない言葉のバリエーションを増やして声かけをすることや、子どもの気持ちを受け止めてから接することで、子どもたちに安心感を与えられるということも話されました。



サテライト会場では、オンラインを通して講話を視聴し、参加者が画面越しに講師の言葉に真剣に耳を傾け、メモを取りながら熱心に講話を視聴する姿が見られました。演習の時間には、どの会場においてもグループごとに活発な意見交換が行われ、子どもの特性に応じた関わり方について、具体的な事例をもとに考えを深める様子が印象的でした。サテライト形式でありながらも、学びの深まりと交流の充実が感じられる研修となりました。

今後も、地域の実情に応じた柔軟な研修の在り方を継続し、放課後活動の質の向上と指導者の資質向上を図ってまいります。



★受講者の声★

- ・子どもを動かす支援ではなく、安心して動けるための支援を心がけようと思えました。一生懸命その子に向き合い、自分なりの回答を見出したいです。
- ・「どう答えたらいいのだろう。どうしたらいいのだろう。」と考え込むことも多かったのですが、案外ことも本人に聞いてみるというのでもいいのかもと感じました。答えられるかは分からないけれど、コミュニケーションにつながるので、一つの手段になるのではないかと思います。
- ・気になる子を肯定的に表現するのは初めての体験でした。どうしても「走ってはだめ」とか「大声を出さないで」とか否定的になってしまうことが多いのですが、「そうするだけの理由がある」「そうせざるを得ない何かがある」と視点を転換してみるものの大切さに気付かせていただいた研修でした。

研修内容の詳細に関するお問い合わせは栃木県総合教育センター生涯学習部まで

TEL:028-665-7206

e-mail: skc-syougai@pref.tochigi.lg.jp